

純潔と寛容(四)

本多弘之

bonda hiroyuki

願心

「詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなり」とは、『歎異抄』第二条の親鸞の表白である。もちろんこれに先立って、自己の信念のあり方について十分に語っていて、さらに付け加えることはない、という意味もあろうが、それよりも、基本的に自分を

信頼して関東からはるばる訪ねてきた門侶たちに対する場面でのこの表現に、親鸞の厳しい自己認識を教えられるのである。

「愚身の信心」とは、自分が勝手にこのように思うというようなことではない。必死に

なつて求め続けた「生死を出す」道についての決着内容である。しかも、先師源空（法然）に随つて、もしその教えが虚言であつて地獄に墮ちたとしても、自分はまったく後悔はない、とまで思い定めた信念である。そういう信念を語つた上で、自分を信頼して聞き耳を立てている門侶に、これを取るのも捨てるのも、みな自分自身の選びであると、あたかも突き放したように語っているのである。

近代の社会のように、個人の信仰の自由が前提とされ、自由に自己決断することに人間の主体的な喜びがある時代であつても、こういう自己決定を大切にすることはなかなか難しい。まして、「個人の自由」というようなことを価値とする発想がない時代に、このように表現することのもつ厳しさを思うのである。

人間は人間の間に生まれて死んでいく。しかし「生死」の事実には、「身」という限定があり、「身」は他と切り離された「独生独死・独去独来」の厳肅な単独の存在としての生命の場である。その単独の存在が、個たる自己の存在の意味を求めてさまよい歩くのだが、有限なる生命のなかには、その意味を見いだすことができない。いや、一応は相対的な状況において、自己独自の意味を見いだそうとするのではあるが、自己の生存は、時代や社会の変化と共に変動し、詰まるところ「死」

という限界にぶつかつて、自己の内に確保しようとした相対的意味は雲散霧消してしまふ。自己が自己として生きていると同時に、他の自己も同じように孤独の命を生きている。その他との呼応をとおして、自己の意味成就

と他己の意味回復とが、同時交互に響き合うような地平が開かれる。その地平が、自己を超えて自己を意味づける。そういうことが教えられてゐる。仏教用語で言うなら、「自利利他」の具現こそが「如来」のあり方なのである。仏教の「超越」は、この自己を超えつつ自己を支える大地への還帰的超越であると言えようか。

寛容という課題は、単独の個体を絶対条件として出発するなら、決して解くことはできない。個体の自覚には自我意識が密着していて、「自害害彼」（自らが傷つき、また他をも傷つけてしまう）の人間関係をのがれられないのである。けれども、「滅私奉公」というような場合のように、自己を共同体的な権力のかたちに解消することは、消すことのできない悲劇の傷跡を永久にとどめることになる。共同体的な他も、あるいは共同体を自己と同化した場合でも、やはり相対的有限的な個体を本当には破つていないからなのである。自己が自己に悠然と立ちつつ、他己にも他己に安んじて立つことを与える。そういう原理は、自己を超えて自己をも支えるものであ

つて、しかもそれは他律的に自己を圧倒するものであつてはならない。いつでも決断するなら、それから離れうる自由さを許容しているものでなければならぬと思う。

人間存在の個我には、自己正当化しようとする発想の根に、深い自我愛が巣くつている。他我を愛するといつても、自我愛がその根にあることを除くことはできない。そういう有限存在の閉鎖性の底を破つて大地を与えようとするものが、「無限なる大慈悲」として呼びかける「願心」なのであろう。それこそが「利他」を成り立たせる原理だと、親鸞は気づいた。

例えば、われらが音を聞くととき、それはわれらに音を聞くという作用が起こるのだが、起こす力は音にある。それと同じように、われらがわれらを超えた真実に目覚めるのは、真実それ自身のはたらきであると言えよう。「他を真理に目覚めさせる」という利他のはたらきは、如来（真理をもたらすはたらき）の作用なのである。そしてそれを選び取るのは、真理に触れようとする一人一人の決断以外にはないのである。その選びに、混じり気なく立つたのが親鸞だったのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）